

Direek Chaiyanaam. *Thai kab songkhra-amlook khrang thii* 2. Bangkok: Prae Pittaya, 1966. 1147 p.

本書の題名は、「タイ国と第二次世界大戦」の意味である。そして、著者の Direek は、32年革命以来、タイ政界で活躍を続けてきた文官政治家として著名である。外交官歴も長いので、国際的な知名度も高く、そのかれが、このような本を著わしたと知ったら、いちおうの関心を示すものは少なくないはずだ。

たいへんな力作である。大戦直前のタイの外交関係の説明にはじまり、戦争開始後タイの辿った親日化の過程、そして戦後の自由陣営との接近の過程が、こと細かく解説されている。あえて「分析」とはいうまい。事実の羅列は、タイ人特有の *dillettantism* 好みがなくなる限り、どうにもなおらないだろうから。しかし、あわせて1000ページ以上に及ぶ2巻本に、戦争当時のタイが辿った公式外交路線の解説と関係資料がぎっしりと収められているのだから、有益でないはずがない。

本書が無味乾燥な公式記録集纂に堕さなかった理由は、著者自身にとって、戦争当時および戦後のある時期が、ある種の感慨をもって思い起こされる時期だからである。政治家としての Direek が、もっとも華やかな脚光を浴びたのはその頃ではなかったか。従って、本書のある面は、Direek 自身の回顧録でもあるわけだ。かれが1947年2月に Thamrong 内閣を辞任した理由については、当時いろいろ憶測がなされたが、本書において、かれは当時のことをくどく回顧し、理由づけを試みたりしている (pp. 679~708)。だからかれの自叙伝風な個所は、政治史の資料として貴重である。

この本のような力作が、タイ人の手によってどんどん書かれるようになると、タイ研究はもっとおもしろくなることだろう。ふつう、タイの現代政治史研究に役に立つ本としては、匿名のジャーナリストのあやしげな政治論か、さもなくば政府の刊行する公式文書か、そのいずれかしかない。実際政治に関与した政治家は、めったに文章を書かない。この本はその点貴重な例外なのである。

本書全体が貴重な資料の宝庫であるが、なかでも、ふんだんに引用されてあるたくさんの手記や文書の

なかには、ふつう入手できないものもあって（たとえば、pp. 341~474 に引用されてある、戦時中のタイ国内事情を描いた3人の政治家の手記）、この上なくありがたい。

もっとも、いうまでもなく、これも欠点のない本ではない。この本だけで、第二次大戦前後のタイのすべてがわかるとは考えられない。派閥政治を特徴とするタイでは、1人の政治家が知りうる事実は限られている。それに、著者自身、その間駐日大使や駐英大使をしたりして、限られた経験しかもてなかった事実も考えねばならない。また、人間心理や動機が描けていない点に大きな不満が残る。しかし、文句はいうまい。とにかく得難い貴重な本なのだから。

(矢野 暢)

Gordon Young. *Tracts of an Intruder*. London: Souvenir Press, 1967. 191 p. + 12 photographs.

ここで言う“an intruder”とは、著者自身のことを言う。「自然につけられた跡で、生き物が残した跡に対し、人間が残して行った足跡やナイフのキズは“intruder”の跡である。」と言う意味の Lahu-na 語の歌から取られたものである。題名からも分かるように、本書は学問的な研究書ではないけれども、著者の北タイの山地民（主として Lahu 族）との生活が生き生きと描かれていて、非常に興味深い本である。著者はその“Hill Tribes of Northern Thailand”により日本の研究者にも広く名を知られているが、本書は前者とは趣を異にし、北タイの山岳地帯でラフ族の友人とともに行った狩猟旅行に関する九つの話から成る。したがって、文化人類学や言語学の本ではないが、それだけに山地民の性格、移動、村の様子などが、単なる研究者としてではなく、彼らの仲間の1人として、生き生きと描き出されている。すでに知られているが、著者は中国雲南省の Lahu-na 族の村で生まれ、英語よりも Lahu-na 語を先に覚えるほど山地民と密接な生活を送り、ビルマ、アッサム、インド、ヒマラヤを経て、現在は北タイのチェンマイに住み、USOM の山岳民族のエキスパートとして働いている。考えて

みれば、雲南、ビルマ、タイ国北部という著者の歩いてきたコースは、現在の北タイの山地民のほとんどがたどってきたコースと同じだと言える。

現代タイ国では、本当に山地民の生活や性格を残している山地民を探すのは車で行ける所ではもう不可能になりつつあると思われるが、本書に描かれた山地民の村は、すべて徒歩で何日もかかる所ばかりで、まだ平地民の影響を受けて生気をぬかれていない Lahu-na 族、Lahu-nyi 族等が対象になっている。

最後の1章、Beyond the Spirit Gates はアカ族の村に関するものであるが、これも現代のようにわれわれになじみ深いものとなる以前のアカ族を描いたものである。わたくしはアカ族の村に家を建てて住んだことがあるが、本書に描かれているような村へ行くには、わたくしのいた村から3泊4日もかけて歩かなければならなかった。本書が扱っている地域は、北タイの主なる山岳地帯をほとんど全部カバーしている。Lahu-na 族の他に、Lahu-nyi, Lahu-shi, Aka, KMT の兵隊、アヘンの密売団などの動き、動物の分布等が描かれていて、たいへん興味深い本である。

(桂満希郎)

Khanakammakaan chamra prawatsaat thai Khanakammakaan catphim eekasaan thaang prawatsaat watthanatham lae bo-oraannakhadii. *Thalaeng ngaan prawatsaat eekasaan boorannakhadii*, Vol. I, No. 1 & 2. Bangkok, 1967.

1963年に設立されたタイ国歴史(chamra)委員会の研究発表機関であり、4カ月に1回の出版物である。現在、上記の2冊のみが出ている。本書は単行本ではないので、この図書紹介に取り上げるにふさわしいかどうか疑問であるが、同委員会にはタイ国における歴史・考古学の代表的な人達はほとんどすべて含まれており、現在の研究の動向を知るうえで重要な出版物の一つにかぞえられるので、いま出ている最初の2冊のみを紹介しておく。報告の類は別にとすると、第1号には五つ、第2号には六つの論文が発

表されているが、そのうちで1号2号にわたって続くものは、(1)スパタラディット・ディッサクン：13世紀以前の東南アジアの状態について、(2)ローン・サヤーマーン：アユタヤ史、(3)セーンソーム・カセームシー：ラタナコーシン史である。ここでは、この三つを取り上げるにとどめておく。(1)は第1号において地理および風土に関する説明の後、この地域の先史時代の住民に関する論述、ついでインド文化の伝来とフーナンおよびタワラワディーまでを一気に説明し、第2号に入ってマレー半島およびインドネシア群島の西暦前より8世紀に至るまでの状態を説明したものであるが、本論文は未だ完結していない。(2)は第1号でいちおうアユタヤ王朝の変遷を記したのち、第2号では統治、社会および経済を論じており、当時の官僚制度や法律等がかなり詳しく述べられているが、色々な本からひろい集めてそれを並べなおしただけという感じがする。(3)も同様で、これといって新しいものはなく、文献を整理し直したもので、文字通り chamra という感じであるが、第2号のビルマ対タイの多数の戦争の記録は非常におもしろい。これらの論文の他にも、最近の調査の記録や碑文に関する研究発表などがあり、タイ国におけるタイ人の研究活動を知る上で重要な書物と言わねばならない。念のため、次の通り第1号と2号との目録をあげておく。

第1号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa：まえがき
- (2) Phraya Anumaan Raachathon：歴史および考古学について
- (3) M. C. Suphattharadit Ditsakun：13世紀以前の東南アジアの状態について
- (4) Chanthit Krasaesin：第4回委員会記録
- (5) Tri Amaattayakun：スコタイ王朝の古都調査
- (6) Roong Sayaamanon：アユタヤ史
- (7) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii：ラタナコーシン史
- (8) Chanthit Krasaesin：歴史(chamra)委員会設立について
- (9) Prasoe na Nakhoon：スコタイ時代の町の位置決定の方法について
- (10) Wilaatwong Noppharat：ムアング・ウー